

桶狭間の戦いのあったとされる場所の候補は2箇所あり、現在の場所は推定とのこと。説明板には、
 「戦国大名は戦乱の中にあつて互いに全国統一を目指し、しのぎを削っていた。相模の北条、越後の上杉、甲斐の武田、駿河・遠江・三河の今川、尾張の織田等々が勢力を得て、常に領土の拡大、天下支配の野望に燃えていた。今川義元は、約2万5千人の軍勢を率いて永禄3年(1560年)5月12日に駿府を出発した。17日に岡崎へ、18日には沓掛城に入り、尾張大攻撃の準備をした。織田信長は、5月19日未明清洲城出陣に際し、幸若舞の敦盛を舞い、馬上の人となった。清洲を出る時は主従わずかに6騎、途中輪乗りをかけて人数を待ち、熱田神宮に戦勝祈願をした頃は千人余りとなり、合戦の時には3千人程になった。今川軍は、難なく丸根・鷲津を攻め落とし、本陣は桶狭間の松林に休憩して、戦況を聞きつつ昼食をとっていた。その折、天候が急変して夕立となり、狼狽する義元勢をめがけ、太子が根に待機していた信長は一挙に本陣めがけて切り込んだ。信長の家臣服部小平太が、槍で義元を刺し、毛利新助が後から組み付いて首を取った。この戦いの死者は、今川軍2500人、織田軍830人ほどで、要した時間は2時間という一瞬の出来事であった。」と書かれている。分かりやすい説明で「講師師、見てきたような嘘をいい」的な感じもするが、地元の豊明市教育委員会製作のもの。ガイドブックには芭蕉の「あかあかと日はつれなくも 秋の風」の句碑があると書かれているが、見つからず、別の句碑「あと問えば 昔のときのこゑたてて 松に答ふる風のかなしき 香川景樹」があった。

今川義元の墓



今川義元供養塔



あと問えば・・・の句碑



大将ヶ根
 桶狭間古戦場跡で小休憩し、再スタート。

大将ヶ根



10分程歩くと、交差点の信号に「大将ヶ根」の地名表示。面白い名前であり桶狭間古戦場跡の説明板には、信長が攻撃前に待機していたのは「太子が根」と書かれていたので、ひょっとしたら同じではと考え、インターネットで調べたら当たり、大将ヶ根は昔太子が根。

とすると、太子が根と桶狭間とはすぐ近くであり、こんな近くに3千人もの人馬・軍勢が隠れていて分からないなどと言うことがあるのだろうか、斥候も出さずに油断していたのか、気が付いたが味方と思ったのか、色々と考えてしまう。

有松 間(あい)の宿

「大将ヶ根」の交差点から旧東海道は国道1号線から離れ、町中にはいって行く。雨は土砂降り状態となり、民家のガレージの軒下を無断で借りて暫く雨宿り。小降りになったところで歩き始めると、江戸時代にタイムスリップしたような、旧家が道の両側に沢山残っている町並みとなり、地名は有松。町全体を歴史的保存地区した方が良いと思う程旧家が多く、しかもどの家も現役の住居の様である。奈良に住んでいて、奈良市の奈良町や橿原の今井町等の江戸時代の旧家の町並みを見て、或いは今まで見てきた東海道の宿場などと比べて、有松はそのどれにも遜色ないレベル。有松は江戸時代から、「有松絞り」で有名だったそうで、今でも有松絞りの看板を上げた家が多く、そのせいか和服屋や洋服屋も多い。

塗籠づくりの旧家



なまこ壁の土蔵



有松の旧家

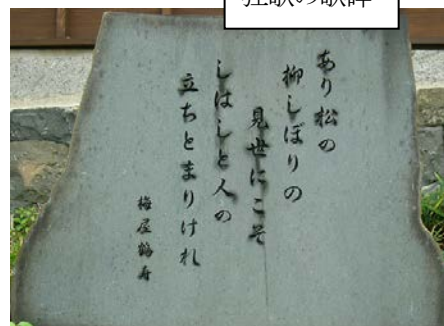


絞りで「ありまつ」の名を浮き上がらせたのれんを軒先に吊るしている家も多い。幕末の狂歌師、梅屋鶴壽の歌碑「あり松の 柳しぼりの 見世にこそ しはしと人の 立ちとまりけれ」がある。因みに、狂歌(きょうか)とは、社会風刺や皮肉、滑稽を盛り込み、五・七・五・七・七の音で構成した諧謔形式の短歌(和歌)とのこと、俳句に対する川柳みたいなものらしい。

しぼりで作ったありまつののれん



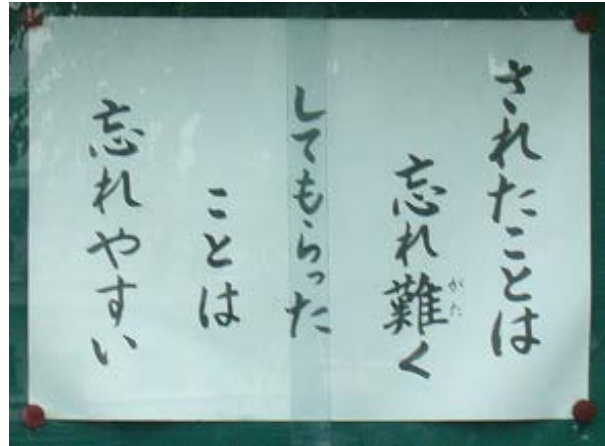
狂歌の歌碑



鳴海宿 40 番目

有松を過ぎ、かまとき橋なる橋を渡る、誰が鎌を研いたのだろうか。更に歩いていくと、右手に石段があり、その上に山門があって寺の名は瑞泉寺、寺の門の寺名の文字は読めないが見事な筆跡。門の横に「されたことは忘れ難く してもらったことは忘れやすい」と書いてある。確かにそのとおり、だから何を言いたいの、とは口にださなかった。

瑞泉寺の門



最古の芭蕉供養塔



この付近は鳴海宿だけ宿場の遺構は何もなく、旧家が何軒かあるのみ。宿場の中ほどに、誓願寺があり、そこに最古の芭蕉供養塔があるとのこと。寄り道、寺では法事と見え、喪服の男女が大勢座っていて、縁側の脇を通って庭に入り小さなお堂(芭蕉堂)の横の供養塔を撮影、ガイドブックには自然石に芭蕉の没年(元禄7年-1694年)が彫られているとあるが、判別不可能。

元の道に戻って歩いていくと、右側に「鉾の木貝塚」の標識があり、すぐその横に裏山に上っていく小さな道があったので、てっきりその先に貝塚があるものと思い登っていったが、畑と民家ばかりで貝塚は見当たらない。途中の民家で縁側に座っていたおばあさんに聞いたが、耳が遠いらしく会話が成立しない。雨の降る中の山道を歩いて損をしたと考えていたら道ばたに彼岸花、お彼岸と言うのにまだ咲いているのは少なく殆どは蕾、更にその付近に直径 10cm 程の大きなきのこ、こんなに大きくなったのは猛暑の影響か、貝塚探しはあきらめて下山。インターネットで調べると、貝塚は残っていないらしい。

彼岸花



大きなきのこ



笠寺

相変わらず雨は降ったりやんだり、天白川にかかっている天白橋を渡り、周囲よりは高くなっている橋の上で名古屋城の天守閣を探すが見えない、建物に隠れているのか、まだ遠すぎるのか。

やがて笠寺一里塚が見え、一休み。一里塚を過ぎると旧東海道名残と思われる旧家があり、更に歩いて笠寺観音(笠覆寺)に到着。

インターネットで調べると「天平8年(736年、一説に天平5年-733年)、僧・善光が浜辺に打ち上げられた流木を以て十一面観音像を彫り、現在の南区粕島町にその像を祀る天林山小松寺を建立したのが始まりであるという。

その後1世紀以上を経て堂宇は朽ち、観音像は雨露にさらされるがままになっていた。ある時、旅の途中で通りかかった藤原兼平(藤原基経の子、875年-935年)が、雨の日にこの観音像を笠で覆った娘を見初め、都へ連れ帰り玉照姫と名付け妻とした。この縁で兼平と姫により現在の場所に観音像を祀る寺が建立され、笠で覆う寺、即ち笠覆寺と名付けられたという」



笠寺観音

笠寺の笠マーク



手押しポンプの井戸



従って、この寺のモチーフは笠、上の写真の笠のマークが寺内のいたるところにあり、赤色が目立ってなんとなく華やかな雰囲気。山門の両脇には立派な阿吽の像、その像の前には大きな草鞋がかけられ、寺内には子供連れの参拝客が多い。

無信心の私には、寺や山門よりも、その前にある井戸の、久しぶりに見る昔の手押しポンプの井戸に興味を覚える。しかも、その手押しポンプは真新しく、どこかでまだ生産しているらしい。

笠寺から道を隔てて玉照姫を祭った泉増院があり、ちょっとだけ覗いて次へ。

泉増院



笠寺を出て商店街を歩いていると、又土砂降りとなってたちまち道路が川となり、傘をさしても歩ける状態ではなく、アーケードの下に避難。 10分程すると小降りとなり、再スタート。

盲導犬碑

30分ほど歩くと、神社があり、その裏は公園(呼続公園)となっていて、ガイドブックによれば神社の裏手に「盲導犬サーブの碑」があるとのこと。インターネットでは、「サーブは雌のシェパード、日本で最も知られたイヌの内の一頭、雪でスリップして突っ込んできた車から主人を庇って重傷を負い、その傷が原因で左前脚を切断」とある。愛犬家としてこれは是非その碑を見たいと考え、探したが見つからず、代わりに盲導犬の碑を見つけた。碑に「盲導犬たちよ 天国で遊んで下さい 盲人の目となり最良の友となり 明日への光となって・・・」と書いてある。泣かせるなあ、まったく。

我家の老犬は全く役立たずで手間ばかりかかり、サーブのツメの垢でもせんじて飲ましてやりたいが、手間がかかることで家族に話題と会話をもたらしている、まあいいか。

タイムカプセル埋設地の碑



盲導犬の碑



盲導犬の碑の追悼文



タイムカプセル

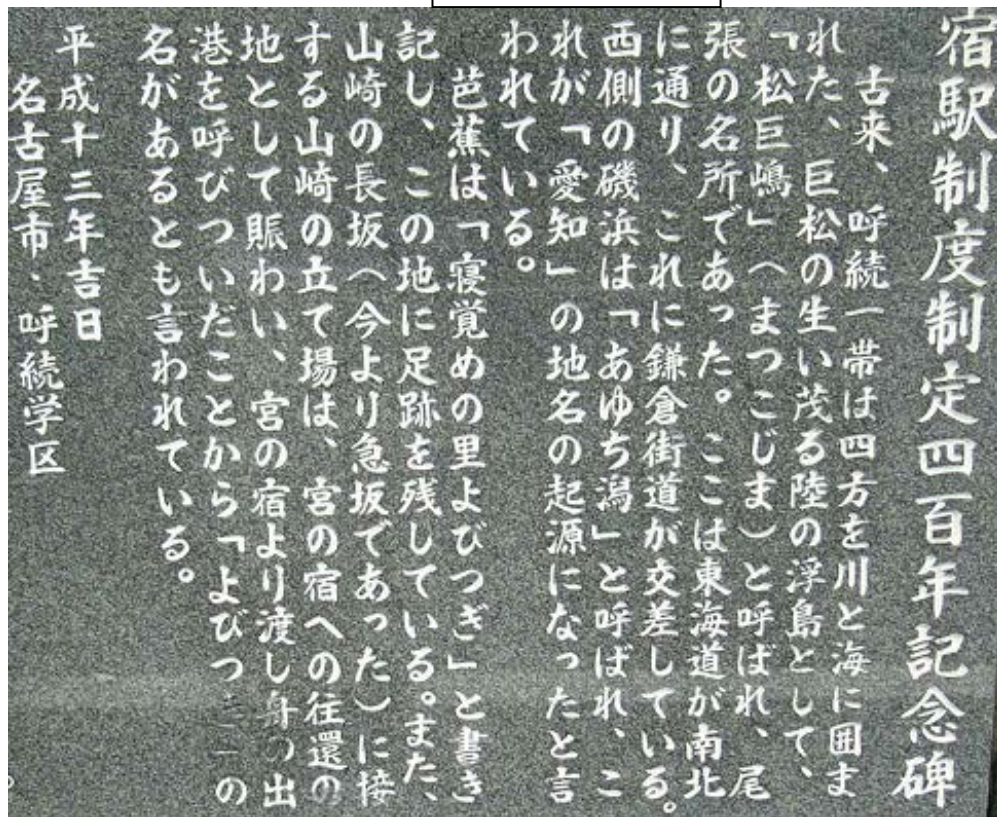
東海道宿駅制度制定 400年記念タイムカプセル埋設の地の石碑があった。

東海道宿駅制度制定 400年となる 2001年に地元でいろんなイベントを行い、最後に写真やメッセージを入れたカプセルを埋め、2051年に開ける予定とか。 地球温暖化、人類が増え続け・・・と想像すると絶対にそれまで生きていたくない。

呼続(よびつぎ)

この地の名称は呼続(よびつぎ)、珍しい地名なので後で調べようと考えていたら、愛知の地名と共にその由来を書いた石碑があった。

愛知と呼続の由来



昼食

国道1号線に合流して、JR 東海道線の踏切りを渡り、熱田川にかかる熱田橋を渡ると宮宿は目前、時刻は12時半。計画では宮の次の桑名で焼き蛤の昼食だったが、雨宿りで時間がかかり計画変更。うどんの看板を見つけ、名古屋のきしめんでも食べようとそのうどん屋へ。しかしメニューにきしめんはなくお奨めは「ささめうどん」。聞いたことのない名前なので尋ねたところ稲庭うどんのような細い麺とのこと、そのささめうどん定食を注文、味はまあまあ、900円也。オーダー後の待ち時間にガイドブックを見ると、少し先にうなぎが名物の蓬菜陣屋あり、残念、もう少し歩けばよかった。

宮宿 41番目

最初にあるのは裁断橋、姥堂、どどいつ発祥地の三つが一緒になった遺跡。

裁断橋の名前の由来は一説に「この場所で事を決定したり、罪に対する裁きを下したりした」とある。

裁断橋 姥堂 どどいつ発祥地



姥堂

それよりも、豊臣秀吉の頃、この橋で息子を戦地に見送った母が、息子の死を聞き、橋の修復を思い立ち、修復した橋の擬宝珠に次のことを書き付け、それが子を思う母の日本3大名文とのこと。

右はその文で、若くして死んだ子の名前を自分が死んだ後も人に覚えていてほしい親の気持ちが現れている。この文章は小学校の教科書にも採用されたとのこと。姥堂とは、姥像がご本尊なのでついた名。

蓬萊陣屋

大きな道路を横断する陸橋を渡っていると、うなぎを焼くいい匂い、陸橋の下にある料亭風の建物の塀には「蓬萊陣屋」の名。ここで昼食にすればよかったな、と玄関の前を通りかかると、そこはガードマンが二人いて雨にもかかわらず並んでいる人と駐車場待ちの車の整理、貼紙があって「只今 60 分待ち」、うどん屋でよかった。

宮の渡し公園

その先は、宮の渡し公園、旧東海道は宮から桑名までは舟となり海路 7 里(28Km)なので七里の渡し。まず目につくのが、時の鐘の塔、これは 1676 年に建てられ旅人の時報となり、戦災で消失し戦後再建したもの。常夜灯は昔の船着場の位置にあり、これも復元したもの。昔の船着場に立ち、雨中の沖合い、と言うよりは川を眺めて写真を撮る。

時の鐘



常夜灯



天正十八年二月十八日に
小田原への御陣
堀尾金助と申す
十八になりたる子をたたせてよ
又二目とも見ざる
悲しみのあまりに
いまこの橋を架けるなり
母の身には落涙ともなり
即身成仏し給え
逸岩世俊（堀尾金助の戒名）と
後の世のまた後まで
この書き付けを見る人は
念仏申し給えや
三十三年の供養なり

七里の渡しの絵、岸に常夜灯が描かれている



現代の船着場からの光景



熱田神宮

予定では、宮の後は電車で桑名に移動して歩き続ける予定だったが、午前中は降ったりやんだりの雨は正午頃から絶え間なく降るようになり、時刻も2時近く、桑名は断念し、熱田神宮に行くことに変更。宮の渡し公園から20分ほど歩くと熱田神宮、40年程前に来た記憶はあるが何も覚えていない。

ここは大きな神社で、広い参道の両側は大きな木で緑のトンネルとなっている。コケッコの鳴き声が聞こえ、探すと鶏が4羽、ひょっとしてこれが名古屋コーチン? 後で調べると軍鶏らしい。境内の一角に桶狭間の合戦で勝利した織田信長がお礼に奉納した信長塀と呼ばれる築地塀がある。

カメラを睨みつける鶏
大丈夫 食べやしないよ



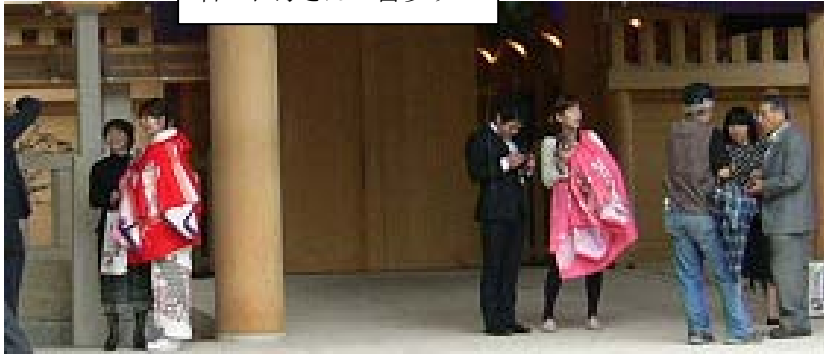
参道の緑のトンネル



信長塀



若いお母さんの宮参り



この時期らしく七五三の晴れ着を飾った子供がチラホラ。二つか三つくらいの着物を着た女の子を見て、若い女性のグループから一斉に「カワイイ」の声、その声を聞いて女の子の手を引き傘を差しかけている祖母らしき着物を着た女性の得意満面の顔！孫を持つ身でその気持ちは良く分かる。

宮参りも何人か、宮参りと云えば祖母が赤ちゃんを抱いてお参りと思っていたが、どうみても母親の若い女性が赤ちゃんを抱いて宮参りの衣装を着ていた。この地方の風習かもしれない。

神宮前から地下鉄に乗り名古屋駅で名古屋在住 I 氏お奨めの藤田屋の「大あんまき」をお土産に買う、餡をどら焼きの皮で巻いたもので美味しかった。最近すっかり甘党になっている。地下の名古屋駅を出た電車が地上に出て外を見ると、雨は上がり晴れ間が出ていた、読みが悪いなあ。

本日は「どこから来たの?」「どこまで歩くの?」と何度か話しかけられた。いつもは話しかけられることは滅多にないので考えたところ、本日は雨でUV100%カットのサングラスをかけていない。サングラスをかけた人には声をかけにくいものらしい。

名古屋では旧東海道の道路に何百 m かおきに東海道道標が埋めてあって分かり易かった。マンホールの蓋はアメンボー(多分)、消火栓の蓋は名古屋城と鯨



15 日目は 4.5 万歩、約 25Km、宿場は二つのみ。今回も新宿駅を深夜 12 時に出る夜行バスに乗り、朝の 5 時半に名古屋着、7 時に名鉄豊明駅からスタート、帰りは名古屋から 15 時半の近鉄特急に乗り、桜井の家に 18 時帰着。

次回は 桑名 -> 四日市 -> 石薬師 -> 庄野

15日目

